

☆☆☆ Library Eye 2021 ☆☆☆

第15号 2021年6月1日(火)

発行元 明星中学校・高等学校 図書館



【コロナ時代はどう描かれるのか！】

新型コロナウイルスの感染拡大は、いまだ収束の兆しが見られず、私たちの日常は大きく変化しました。1年前のこの欄では、カミュの『ペスト』が注目を集めていることや感染症関連の本を取り上げましたが、今回は、コロナの渦中にいながら、コロナを題材にした”コロナ時代”小説を紹介します。

『コロナ黙示録』(宝島社・2020年7月刊)は、世界初の新型コロナウイルス小説とされています。医学博士でもある海堂尊が豪華クルーズ船で起きたパンデミックと忖度政治、大混乱に陥ったニッポンを描いています。『コロナと潜水服』(光文社・2020年12月刊)は、コロナをテーマにしていますが、身近な家庭が舞台の短編集で、奥田英朗作品らしくユーモラスで心温まるストーリーになっています。読後にほっこりしたい人にはおすすめです。



『神様のカルテ』の著者・夏川草介が緊急出版したのが、『臨床の砦』(小学館・2021年4月刊)。彼は現役医師としてコロナの最前線に立ち、昨年末から今年2月の自らの経験をもとに、リアルな現場を描いたドキュメンタリー小説になっています。

ステイホームの今だから生まれたトリックや動機が楽しめるのが『ステイホームの密室殺人』(星海社・2020年8月刊)。織守きょうやなどミステリー作家が競演するコロナ時代の小説アンソロジーで、乙一などが参加した第2巻(2020年9月刊)もあります。

小説ではありませんが、マスク研究者と内科医の共著『感染症時代のマスクの教科書』(小学館・2020年12月刊)も、この時代を反映した話題本です。マスクを”的確に選んで、正しく着ける”方法を楽しく学ぶことができます。矢部太郎(カラテカ)のマンガ解説も必見です。



ソーシャルディスタンス、不要不急の外出自粛、with コロナ等々が叫ばれるなか、家族の関係、他者とのつながり方、働く環境など社会の様々なことが変化してきました。コロナ時代の小説もこれから変わっていくかもしれません。

【犬・猫がでてくる小説&メンタル・織細さんのための本】

5月後半から図書館入口スペースで「犬・猫がでてくる小説」と「メンタル・織細さんのための本」の2つのテーマの展示をしています。

動物の中でも私たちの最も身近にいる犬や猫がでてくる小説は、感動的で優しい気持ちにしてくれます。本屋大賞3位の『犬がいた季節』(伊吹有喜・双葉社)や衝撃の結末に号泣する…と評判の『悲しみの底で猫が教えてくれた大切なこと』(滝森古都・SBクリエイティブ)など、犬好き、猫好き、動物があまり好きでない人にもおすすめの本がたくさんあります。



メンタル関連は、不安な気持ちを抱えていたり、心穏やかに過ごしたいと思っていたりする人のために、何かヒントになりそうな本を集めました。『「織細さん」の本』(武田友紀・飛鳥新社)、『多分そいつ、今ごろパフェとか食ってるよ』(Jam・サンクチュアリ出版)など話題本やコミカルな本もあります。メンタルヘルスから癒し、睡眠や入浴法、リラックス方法、元気が出る言葉まで幅広く展示しています。どちらの展示本も、よく借りられています。

【2021年4月、探究型学習がスタートしました！】

2014年、愛知県の中学2年生の男子生徒が、太宰治の『走れメロス』のメロスが実は「走っていなかった」ことを星の位置や日没時間などの描写などを元に証明し、理数教育研究所主催の「算数・数学の自由研究」作品コンクールで入賞しました。こうしたチャレンジこそ探究型学習と言えるでしょう。

探究型学習は教科書を使わない授業で、その出発点は、生徒の自発的な疑問にあります。その疑問を解き明かすために「課題設定」→「情報収集」(インプット)→「整理・分析」→「プレゼン・論文製作」(アウトプット)→「リフレクション」→「軌道修正」→「プレゼン・論文製作」というプロセスを繰り返していきます。

そして、その問題解決のプロセスを評価するのがルーブリックで、探究型学習の達成度を測る必要上、この客観的な評価基準を設定することが必要です。



【探究型学習を成功させるためには？】

では、進学後、及びビジネスの世界で活かせる非認知能力を培う探究型学習を成功させるためのポイントとは何でしょうか？

- ①生徒に探究型学習の目的、探究活動を行うための基礎的なノウハウやスキルなどを伝えること。
- ②フィールドワーク(現地での調査・研究・インタビュー)を通して「ホンモノ」に触れさせること。
- ③《知》の拠点である図書館を活用すること。
- ④デジタル機器を使つての情報収集、及びプレゼン技術を習得すること。
- ⑤問いを生徒自身が立てること。
- ⑥ルーブリックで客観性の高い評価を行うこと。

識者に拠れば、**多くの学校では「探究型学習」を「調べ学習」と勘違いしている**ということですから、よくよく注意しなければなりません。その違いは「生徒自らが問いを立てているかどうか」にあります。例えば、生徒を石舞台に連れていき、「歴史」をテーマに研究論文を書きなさいと指示したら、それはすでに「調べ学習」へと逆戻りしているのです。あらかじめ指導者側が下調べをしたテーマへと誘導することは、探求型学習の要諦である主体性の芽を生徒から摘みとってしまうことにもなりかねません。



そこで有効なのが、生徒を図書館に連れていき、テーマを選ばせる方法です。29歳の若さで「アメリカ最高の教授」の1人に選ばれたサム・ポトリッキオが、リーダーを育てるため3つの目標を挙げています。

- その1. 毎週、最低3冊の本(伝記文学、小説、専門外分野)を読むこと。
 - その2. ネットではなく、紙ベースの情報源(新聞、書籍)を使うこと。
 - その3. スマホの使用時間1日20分以内にする。
- 人間は新しい刺激に弱く、SNSからもたらされる情報(メッセージ、動画、広告など)が集中力を奪い、イノベーションや独創性が育つプロセスを妨害することになる、というのです。

実際、探究型学習を先進的に推進している清教学園中学校・高等学校(大阪府)では、中学3年生になると、図書館(6万7千冊)の蔵書を最大限に活用して1万字の卒業論文を作成しています。SNSから得られる情報は信憑性がないものも少なくなく、将来、レポート作成やプレゼンテーションをすることを考慮すれば、ソースの典拠・引用の仕方も併せてマスターしておくことが大切です。

明星の図書館は蔵書数8万5千冊、まさに《知》の宝庫と呼ぶにふさわしく、どれだけ多種多様なテーマにも対応できます。現在、図書館としても探求型学習にどのようなサポートができるか、スタッフと共に検討中です。

